

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 23 日現在

機関番号：12102

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2015

課題番号：25380869

研究課題名(和文) 両親の抑うつと幼児の適応に関する検討

研究課題名(英文) The adjustment of children of depressed parents

研究代表者

安藤 智子 (ANDO, Satoko)

筑波大学・人間系・教授

研究者番号：90461821

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,800,000円

研究成果の概要(和文)：両親の抑うつと幼児の行動について量的研究及び実験室状況における観察により検討した。まず、夫婦ペア縦断データ分析から、母親と父親の産後5週の抑うつが、産後1年の夫婦関係の機能、養育態度を介して4歳児の問題行動を予測するモデルを検討した。また、4歳児の父母子の観察により、親の子どもへの態度、子どもの親への態度、子どもの遊びへの取り組み、家族コミュニケーションの特徴の観点から検討した。その結果、親の応答性・家族の親密性・個別性、柔軟性、子どもの遊びの質のよい群と、やりとりが否定的・侵入的、子どもの父母への指示・命令の2群が見いだされた。この2群間で子どもの多動傾向や母親の抑うつ得点に差が認められた。

研究成果の概要(英文)：We used the structural equation modelling technique to examine the effect of parental depression on parenting style and marital functioning 5 months and 1 year after birth, and behavioral problems in 4-year old children using longitudinal data. Furthermore, we observed mother-father-child interactions in a laboratory setting. Our assessment of parent-child attitudes and family communication revealed two types of interaction: one characterized by responsive parents and intimate parent-child interactions, high-quality play and family functioning that allowed individuality and flexibility, and the other characterized by negative, intrusive and harsh parenting and strict rules, an authoritarian attitude on the part of the parents, and children's loss of respect for their parents. The incidence of hyperactive children and mothers' depression scores were significantly different between groups.

研究分野：発達臨床心理学

キーワード：養育者の抑うつ 養育態度 縦断研究 子どもの行動特徴 夫婦関係機能 アタッチメント 観察

1. 研究開始当初の背景

母親の抑うつが乳幼児との相互作用の質に影響し、子どものアタッチメント形成や認知機能の発達、行動特徴に寄与することは多くの研究で示されてきている。しかし、家族成員であり、母親や子どもにとって重要な対象である父親の抑うつやその家族への影響についての本邦での研究は限られている。他国の研究結果では母親が産後抑うつの場合、父親も産後抑うつになる可能性が高まることも示唆されており、その結果子どもへ発達への影響は重大であることが推測される。父親の抑うつを予測する要因や、母親の抑うつとの相互の関係性についての検討が重要であるといえる。

また、夫婦の良好な関係性は幼児の外在化傾向や内在化行動との関連が指摘されている (Grych, et al., 2003)。日本においても夫婦関係が家庭の雰囲気や子どもへの抑うつ傾向を予測すること (菅原ら, 2002) や、良好な夫婦関係が母親の子どもへの否定的な感情や不適切な養育態度を緩和すること (安藤・無藤, 2009) などの縦断研究の結果が示されている。従って、幼児の行動特徴を、母親のみならず、父親の特徴や夫婦関係の特徴を同時に検討する必要がある。

2. 研究の目的

上記の問題意識から、研究1では幼児期の子どもの行動特徴に両親の抑うつ、養育態度、夫婦関係がそれぞれどの程度影響しているのかを両親ペアの縦断データの分析により明らかにすることを目的とする。研究2では、4歳児の家族の相互作用の特徴と、両親の抑うつや子どもの行動特徴について、観察による測定を通して検討することを目的とする。

3. 研究の方法

研究1

2009年に縦断研究に登録された夫婦に、質問紙法による調査を実施した。

研究2

(1) 観察手続き及び観察指標作成：観察に用いる指標と実験の手続きを検討するために、4歳児のいる5家族に予備観察を実施した。
 (2) 対象者・実施場所・実施時期：2009年より開始した縦断研究協力者に、観察実験研究への協力を求め、参加希望の返信のあった家族22組を対象に2014年11月から2015年4月に実施した。観察場所は実施者の大学(15)、協力者宅近くの公民館(2)、協力者の自宅(5)であった。

(3) 観察手続き：子どもが興味をもって取り組める遊び場面と、軽いストレスを入れること、また家族の3人のやりとりを観察できる手続きを考案した。場面設定は、見本入りブロック、おままごとセット、画用紙・クレヨン・折り紙セットの3種類のオモチャをそれぞれ東袋に入れてテーブルに置き、ビデオも

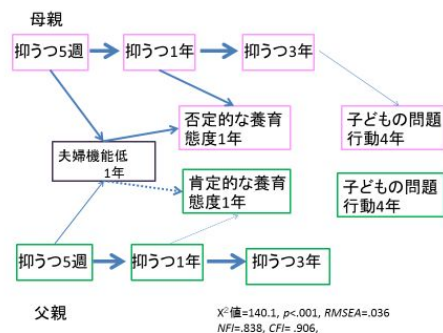
室内に設置し録画した。【父子場面】遊び場面(10分) 片づけ場面(3分) 【母子場面】遊び場面(10分) 片づけ場面(3分)

【父母子場面】話し合いの手続きとし、遊びの順番の効果を考慮して、対象者毎に手続き1、2で父子、母子を入れ替えて実施した。
 (4) 観察指標：親の子どもへ態度の観点として「肯定的な感情や態度」「応答性」「励まし」「教育」を Parenting Interactions with Children: Checklist of Observations Linked to Outcomes (Roggman, et al., 2013; PICCOLO) を参考に作成し、更に「侵入性」「否定的な感情や態度」、子どもの特徴として「遊び」や親への「指示・命令」「感情表現」の指標を加えた。また話し合い場面での家族コミュニケーションの特徴を、FACES (Olson, 1985) および CFI (Leff, 1985) を参考に「個別性 巻き込み」「柔軟性・適応性」「親密性」「批判・敵意」の観点を作成した。2名の評定者で各ケースの評定を行い、一致しなかった部分については話し合いによって評定を決定した。

4. 研究成果

研究1

産後5週、1年、3年の父母それぞれの抑うつ得点が、産後1年の夫婦関係の機能、養育態度を介して4年目の子どもの問題行動に寄与するモデルを検討した。その結果、母親の抑うつは産後1年の夫婦関係の機能に負のパス、否定的な養育態度に正のパスが認められ、抑うつから子どもの問題行動への寄与が認められた。一方、父親の抑うつは肯定的な養育態度に負の影響を与え、子どもの問題行動へはパスがつかつながらなかった。本解析から、父母の抑うつは、夫婦関係の機能を低下させること、養育態度に影響することが明らかになった。また、抑うつから子どもの行動へのパスは母親からしか出なかったことから、日本では父親の養育への関わりが限定的であることが推測された。



研究2

母子、父子の関係性の指標と家族コミュニケーションの指標をコレスポネンス分析により検討した。母子、父子ともに第1, 2象限に「励まし」「応答性」「教育」、第3, 第4象限に「侵入性」「否定的な感情や態度」

が付置された。研究2における親子の相互作用の特徴はこの2群に分けて検討した。更に子どもの遊びや感情表現を加えたコレスポネンダ分析では、第1,2象限に応答性や励ましに加えて、家族の「親密性」「個別性」「柔軟性・適応性」子どもの「遊びの特徴」が近接し、「侵入性」や「否定的表現」のある第3,4象限には子どもの父母への「感情表現」父母への「指示・命令」、話し合い場面での「子どもの意見への(親の)巻き込まれ」がプロットされた。親の関わりと子どもの遊びや感情表現、家族のコミュニケーションの質の関連が示唆された。

一方、母子、父子での遊び場面では応答的に関わっていた親が、父母子での話し合い場面になると、子どもに対して「否定的な感情や態度」や、からかったり茶化すなどの「侵入性」などの特徴が認められたり、パートナーに対して「批判・敵意」が表出され、二者では落ちついて遊んでいた子どもが、家族場面では混乱したり、話し合いに加わらない家族も認められた。子どもの適応を予測するためには親子関係に加えて夫婦関係を含めた家族の特徴をとらえていくことが重要であることが示唆された。

更に、SDQを行為、多動・不注意、情緒、仲間関係、向社会性の5つのサブスケールに分けた(Matsuishi他,2008)、EPDSの項目から抑うつ得点を算出し、MLSは5項目の総得点の平均値を算出した。両群間の得点の分布の相違が有意であるかどうかを検討するために、母親、父親別にKruskal-Wallisの検定を行ったところ、母親においてSDQ多動得点とEPDS得点があること示された($p < .05$)。母親のその他の尺度と父親には有意な分布の差は認められなかった。母子の関係性が応答励ましタイプ群よりも侵入性タイプ群の方が、子どもの行動に多動傾向が多く、母親の抑うつ得点が高いことが見出された。以上のことから、4,5児の親子相互作用の関係性には、母親の捉える子どもの多動傾向と母親の抑うつが関連していることが示唆された。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計4件)

上田倫子・塩崎尚美、幼児を持つ母親の子育ての現状と子育て不安との関連、日本女子大学人間社会研究科紀要、査読無、20巻、2014、143-160

無藤隆、実践現場における発達研究の役割：実践的研究者と研究的実践者を目指して、発達心理学研究、査読無、24巻、2013、407-416

安藤智子、養育のスタートとしての周産期母性衛生、査読無、53巻、2013、7-16

塩崎尚美、保育所における臨床心理学的コンサルテーションの可能性を探る：他事のもの盗んでしまった子どもの事例へのコンサルテーションを通して、日本女子大学人間

〔学会発表〕(計10件)

塩崎尚美・安藤智子・福丸由佳・無藤隆、4・5歳児の母子、父子遊び場面と父母士の問題解決場面の検討2：子どもの行動傾向、親の抑うつ、夫婦関係との関連、日本発達心理学会第27回大会、2016年5月1日、北海道大学(北海道)

安藤智子・塩崎尚美・福丸由佳・無藤隆、4・5歳児の母子、父子遊び場面と父母士の問題解決場面の検討1 両親の養育態度と子どもの感情表現、家族コミュニケーションの関連、日本発達心理学会第27回大会、2016年5月1日、北海道大学(北海道)

安藤智子 乳幼児の否定的な感情を養育者はどう受けとめ対応するか、日本発達心理学会第26回大会 自主シンポ 子どもと養育者の感情に関わる支援 話題提供、2015年3月21日、東京大学(東京)

安藤智子 両親の抑うつの相互影響関係と子どもの発達：妊娠期から幼児期までの縦断研究から、日本発達心理学会第26回大会、ラウンドテーブル話題提供、2015年3月20日、東京大学(東京)

塩崎尚美 2歳児の保育におけるマイルールの意義：移行対象と一人でいられる能力の発達との関連から、日本発達心理学会第26回大会、2015年3月20日、東京大学(東京)

河田瑛、塩崎尚美 乳幼児をもつ夫婦における父親のストレス：仕事と家庭の多重役割、職場の環境、性役割観、夫婦関係の観点から、日本発達心理学会第26回大会、2015年3月20日、東京大学(東京)

脇坂陽子・安藤智子、青年期女性の女性性の発達と被養育経験との関連、思春期青年期精神医学界第27回大会、2014年7月5日、北海道大学(北海道)

Satoko Ando et al., Postpartum depression of fathers' from pregnancy to one year and its relation with mothers' depression, The 14th World Association of Infant Mental Health World Congress, June, 14th, 2014, Edinburgh International Convention Centre(England)

安藤智子他、父親の産後の抑うつと関連要因、日本発達心理学会第25回大会、2014年3月21日、京都大学百周年記念館(京都)

安藤智子他、総合周産期母子医療センターで出産した夫婦の縦断調査：父親の妊娠中から産後1年までの抑うつ、日本母性衛生学会第54回大会、2013年10月4日、大宮ソニックシティ(埼玉)

〔図書〕(計3件)

大川一郎・濱口佳和・安藤智子、生涯発達
の心理学、サイエンス社、2015、236頁
無藤隆他、発達心理学、培風館、2014、258
頁、1-76。

無藤隆他、発達心理学、東京大学出版会、
2013、376頁、207-249。

6. 研究組織

(1) 研究代表者

安藤 智子 (ANDO, Satoko)

筑波大学・人間系・教授

研究者番号：90461821

(2) 研究分担者

塩崎 尚美 (SHIOZAKI, Naomi)

日本女子大学・人間社会学部・教授

研究者番号：30350573

福丸 由佳 (FUKUMARU, Yuka)

白梅学園大学・子ども学部・教授

研究者番号：10334567

無藤 隆 (MUTO, Takashi)

白梅学園大学・子ども学部・教授

研究者番号：40111562

(3) 連携研究者

関 博之 (SEKI, Hiroyuki)

埼玉医科大学・産婦人科・教授

研究者番号：20179328